

# 令和2年度 事業報告

令和2年1月1日から令和2年12月31日まで

一般社団法人全日本実業団自転車競技連盟

## 1. JBCFロードシリーズ

・令和2年は新型コロナウイルスの感染拡大によって多大な影響を受けた一年であった。2月25日に「新型コロナウイルスに関する連盟方針」を発表し、大会開催可否判断や対策について公開。当年度の事業概要などを広く発信する場の3月15日「プレス発表会とスターティングパーティー」は「新型コロナウイルスに関する発表」としてプレスリリース配信と形を変えた。そして、大会開催に向けて関係各所と調整を続けたが、4月4日、5日「舞洲タイムトライアル／舞洲クリテリウム」から7月12日「石川サイクルロードレース」まで、全12戦は、感染拡大の状況から中止した。その後は、並行して進められた準備により、6月25日に策定した「大会開催ガイドライン」（詳細は第3項に）を元に7月18日、19日「きらら浜タイムトライアル／クリテリウム」でようやく初戦を迎えることとなった。そして10月18日「しゅうなんクリテリウム」を最終戦とし、非常事態の中で最大限の感染拡大の対策を行いながら、短くも濃密なシーズンを走りきった。

### ・Jプロツアー

18チーム①マトリックスパワータグ、②Team BRIDGESTONE Cycling、③宇都宮ブリッツェン、④シマノレーシング、⑤VICTOIRE 広島、⑥弱虫ペダルサイクリングチーム、⑦イナメ信濃山形、⑧Team UKYO、⑨Hincapie LEOMO Bellmare Racing Team、⑩稲城 FIETS クラスアクト、⑪那須ブラーゼン、⑫VC 福岡、⑬レバンテフジ静岡、⑭eNShare Racing Team、⑮KINAN Cycling Team、⑯群馬グリフィンレーシングチーム、⑰愛三工業レーシングチーム、⑱さいたまディレーブが加盟した。

11ラウンド、17レースを計画していたものの、新型コロナウイルス感染拡大の影響により「石川サイクルロードレース」「南魚沼ロードレース」等の公道レースを中心に中止せざるを得ない状況となったが、広島中央森林公園や群馬サイクルスポーツセンターでの代替大会を積極的に実施することで、7ラウンド、14レース開催まで持ち直すことができた。

開幕戦は4月18日に当初予定されていたが、7月23、24、25日に群馬サイクルスポーツセンターで「東日本ロードクラシック群馬大会」として実施された。なお当大会は3日間開催に拡大され、3日間合計のポイントで個人総合時間賞を競う新たなステージレースとしてチャレンジも行った。

年間個人総合優勝はレオネル・キンテロ選手（マトリックスパワータグ）、年間チーム総合優勝はマトリックスパワータグが獲得した。

・Jエリートツアー

25ラウンド、38レースの計画であったが、各ヒルクライム大会を始めとした普及大会中止の影響で大会数が減少し、10ラウンド、19レースが行われた。個人総合優勝およびクリテリウムランキング優勝は東優仁選手（VC福岡（エリート））が獲得した。

・Jフェミニンツアー

22ラウンド、30レースの計画であったが、9ラウンド、17レースが開催され、個人総合優勝は唐見実世子選手（弱虫ペダルサイクリングチーム）が獲得した。

・Jユースツアー

6ラウンド、9レースの計画であったが、6ラウンド、7レースとなり、個人総合優勝は神村泰輝選手（スミタ・エイダイ・パールイズミ・ラバネロ）が獲得した。

・Jマスターズツアー

開催大会を一部変更し、予定通り5ラウンド、5レースが開催された。個人総合優勝は松井大悟選手（イナーメ信濃山形）が獲得した。

・一般大会

1月5日「ツインリンクもてぎサイクルマラソン」を実施。4月12日「伊吹山ドライブウェイヒルクライム」は中止。

※各大会の日程は「2020 JBCF Road & Track Series レース開催スケジュール」参照

## 2. JBCFトラックシリーズ

① 8月1-2日「第51回 JBCF 東日本トラック」（松本市美鈴湖競技場）

② 8月8-9日「第54回 JBCF 西日本トラック」（京都向日町競輪場）

③ 10月17-18日「第51回 JBCF 全日本トラックチャンピオンシップ」（境川自転車競技場）

上記3大会を開催した。各大会において、新型コロナウイルス感染拡大によって他団体主催大会の多くが中止となったことから、当連盟の加盟登録選手以外のオープン参加を積極的に受け入れた。そして当年初めて、オリンピック種目であるオムニアムを実施した。なお東日本トラックでは男子4km インディヴィデュアルパーシュート、1km タイムトライアル、女子チームスプリントにおいて、それぞれ実業団記録が更新され、全日本トラックでは、東京五輪代表内定の橋本英也選手（Team BRIDGESTONE Cycling）がオムニアムで圧勝し、2位と40ポイント近い差をつけて、格の違いを見せつけた。

## 3. 新型コロナウイルスに対する取組み

少しでも早くレース開幕し、自転車競技者の走る場所を提供したいという思いから、スポーツ庁や公益財団法人日本スポーツ協会等のガイドライン、および公益財団法人日本自転車競技連盟（以下、JCF）からのアドバイスをもとに、当連盟独自の大会開催ガイドラインを6月25日

に制定・発表。大会参加者や競技役員、運営スタッフなどの健康状態事前申告や、大会会場での検温、ソーシャルディスタンス確保やアルコール消毒などを徹底する形で大会運営を行った。Jプロツアー開幕戦「東日本ロードクラシック群馬大会」には、他団体に先駆けての大会開催ということで、JCFを始め他団体や行政が多く視察に訪れ、メディアにも取り上げられた。

大会は原則、無観客開催とし、スタートリストやコミュニケなどは印刷を廃し公式ウェブサイトで積極的に情報公開を行い、期せずしてペーパーレス化によるサステイナブルな運営を推進することができた。

チームアテンダント講習会（詳細は第7項に）のオンライン実施、YouTubeでの「オンラインファンミーティング」開催などの新しい取組みは、受講者の負担軽減や、新たな広報活動として、ファン獲得へと繋がった。

#### 4. 新型コロナウイルスに関する助成金

公益財団法人JKA「新型コロナウイルス感染症の拡大防止策に対する支援」、スポーツ庁「令和2年度スポーツイベントの再開支援事業」、中小企業庁「持続化給付金」、中小企業庁「家賃支援給付金」を申請、受理され、前者2件は精算中、後者2件は令和2年内に入金・計上済み（給付額は順に2,000,000円、300,000円）である。各所からの補助金、助成金は、当連盟にとって大会再開への取組みや事業継続のための大きな推進力となった。

#### 5. 加盟登録状況

・当年度の加盟登録状況は282チーム、2,158選手。前年比はチーム92.2%、選手84.8%となった。令和元年登録選手で一年間まったく大会出場しなかった層が一定数おり、今後、より魅力ある大会運営を継続していくことで、当面の目標である「加盟登録者3,000名」を実現したい。

・大会参加者数は延べ5,959人（前年比58.2%）となった。大会数の減少、および加盟登録者が新型コロナウイルスを理由に大会参加を控えたことが原因と考えられる。2,158名の加盟登録者のうち863名が、一度も大会に参加しなかった。

#### 6. 競輪公益資金補助事業

競輪の補助金を受けて、令和2年度の下記事業を行った。本事業の実施により、全国組織の連盟として、幅広い競技者に向けて日本各地で大会を開催し、日頃の修練の成果を示す場を提供することで競技力の向上を目指し、一般社会の自転車競技に対する正しい知識と理解を深め、自転車競技の進歩を即し普及促進を図った。また、競技団体として、安全安心な大会運営やより効果的な広報活動を求められることで、年々経費が嵩む中、当補助金の役割は大きく、また、競輪補助事業をもっと広める活動にも微力ながら注力をしていきたい。

① 7月23-25日 第54回JBCF東日本ロードクラシック群馬大会(群馬サイクルスポーツセンター)

- ② 8月1-2日 第51回 JBCF 東日本トラック(松本市美鈴湖競技場)
- ③ 8月8-9日 第54回 JBCF 西日本トラック(京都向日町競輪場)
- ④ 8月29-30日 第54回 JBCF 西日本ロードクラシック広島大会(広島中央森林公園)
- ⑤ 10月11日 JBCF 経済産業大臣旗ロードチャンピオンシップ(群馬サイクルスポーツセンター)
- ⑥ 10月17-18日 JBCF 全日本トラックチャンピオンシップ(境川自転車競技場)

なお補助対象事業である7月開催「石川サイクルロードレース」は中止となったものの、企画変更により、福島県石川町地区の学生とJプロツアー選手との交流オンラインサイクリングイベントを、Zwift（ヴァーチャルサイクリングのプラットフォーム）を利用し、令和3年3月内に実施予定である。

## 7. 講習会

2月22日、6月20日、6月21日、7月11日に「JCF 公認チーム・アテンダント講習会／アンチドーピング講習会」を開催した。2月22日は品川第一区民集会所にて、それ以降はJCFと連携し、Zoom（ウェブ会議サービス）利用によるオンラインでの実施となり、受講者数はそれぞれ66名、32名、27名、50名であった。4回の講習会を通じて合計で175名のアテンダント登録者が生まれ、また、この開催ノウハウにより、今後、全国からの参加がしやすくなることから、自転車競技の普及に大いに寄与することができ、非常に有意義であった。

## 8. 公式ガイドブック

例年、JBCF ロードシリーズの公式ガイドブックを冊子として印刷してきたが、当年は、新型コロナウイルス感染拡大予防の観点から、公式ウェブサイトでの公開のみとする予定だったが、開催地行政や登録各チーム、ファンからの強い要望があり、急遽4千部のみ印刷し、関係各所やJプロツアー各チームに一定数を無償で配り、大会会場でも来場者へ配布を行った。

## 9. 年間アワード

例年、日本最大のスポーツバイクの展示、試乗イベント「サイクルモードインターナショナル」のメインステージで年間アワードを実施し、最終戦「幕張新都心クリテリウム」も併催してきたが、当イベントが中止となってしまったため、一般財団法人日本自転車普及協会の協力を得て、自転車文化センター（東京都品川区）にて、年間アワードを執り行った。この様子は、当日会場に来ることができなかった表彰対象選手のビデオレターと合わせて即日YouTubeで配信し、多くの関係者やファンに観ていただき、また、メディアからは取材を受け、例年になく広報活動に繋がった。

## 10. 協賛

令和2年度のオフィシャルパートナーはシマノセールス株式会社、パナソニックサイクルテ

ック株式会社、株式会社あさひ、一般社団法人自転車協会、株式会社パールイズミ、江崎グリコ株式会社、株式会社アールビーズ（新規）、株式会社スポーツ IT ソリューションの 8 社、サイクルアクティブプログラムとして、コーユレンティア株式会社、株式会社 NIPPO、株式会社日本旅行、株式会社オージーケーカブト、マヴィックジャパン株式会社、シュアラスター株式会社（新規）の 6 社、合計 14 社から、ご協賛いただいた。

## 1 1. 広報

・J SPORTS（株式会社ジェイ・スポーツ）、株式会社毎日新聞社、LAP CLIP（株式会社マトリックス）、株式会社 PR TIMES とメディアパートナーシップを締結し、広報活動に協力を頂いた。

・J SPORTS では 8 月 24 日、10 月 5 日、10 月 12 日、10 月 26 日の 4 回に渡って、「Cycle\*2020 月チャリ～#jspocycle NEWS～」番組内にて、J プロツアーのレースダイジェストを放映した。日本のサイクルロードレースファンに対して、広く、J プロツアーの映像を届けることができた。

・毎日新聞には、全国版スポーツ欄に、J プロツアーの大会結果が 7 戦掲載された。プロ野球や J リーグと同じページに扱われたことは、自転車競技の普及にとって非常に有意義なことと捉えている。

・LAP CLIP は本年も全戦において協力いただき、各クラスターのラップタイムや順位を速報として公開。参加者やファンにとっても、大会役員や運営サイドにとっても、リアルタイムの計測情報は、新たな観戦の魅力創出とともに、大変重要な情報となっている。

・PR TIMES を通じて、自転車関連媒体のみならず、広く一般媒体等に向けても JBCF のプレスリリースを配信することができた。当連盟や主催大会の認知向上の強い味方となっている。

・開催した J プロツアー全レースを、YouTube でライブ配信した。当年は原則無観客開催であったが、より多くのファンに映像という形でレースの様相を伝えることができたのみならず、YouTube コメント欄や SNS におけるファン同士の活発なコミュニケーションのきっかけを作ることができた。

・J プロツアーチームや選手の PR の場として、新たに「オンラインミーティング」を実施した。5 月 10 日配信の初回は J プロツアー選手とファンによる交流の場として、その後は監督や選手による大会の振り返りや次戦への意気込みを、Zoom によるミーティングという形で YouTube 配信を行った。

・JBCF の公式ウェブサイトが「連盟サイト」「ツアーサイト」の 2 つに分かれていたが、「必要な情報がどちらにあるか分かりにくい」という声が多く寄せられていたため、1 つに統合した。「分かりやすくなった」と好評で、ウェブサイト更新作業時間が軽減されることで、よりスピーディーな対応が可能となった。

## 1 2. その他の取り組み

・6月20日付退任の片山右京前理事長に変わり、安原昌弘が理事長に就任。オリンピックとして、競技者の視線から、改めて「選手ファースト」を掲げた連盟運営を宣言した。

・株式会社アールビーズとの共同事業として予定していた「JBCF・RBS チャレンジシリーズ」は、新型コロナウイルス感染拡大にともない大会中止が続いたことで、実施を断念せざるを得なくなった。ただし Zwift を用いた、アールビーズ主催の6月7日「バーチャル Mt.富士ヒルクライムレース」にJプロツアー選手が参加し YouTube で配信したほか、公式ガイドブックの制作委託、新規大会開催に向けた共同での営業活動など、アールビーズとの協業によって価値のある効果を創出した。

・9月6日に「JBCF アジェンダ2022」を発表。「2021年新リーグ構想」を一旦凍結し、連盟の安定した経営を優先する旨や、参加型レースとしての価値向上に立ち返り、底辺及び間口拡大に力を入れる旨など6項目を発表した。そして11月18日には「原点回帰でレースを継続開催します」と宣言。また12月8日には2021シーズンの「Jプロツアーチーム一覧」や予定大会数を公開し、「活動方針」として選手ファーストで大会を運営していく決意とともに「従来の基本方針である『継続』『拡大』『向上』に追加して、『感謝』『強化』を加えた5Kで“極”進みます」というメッセージを発信した。

以上